

# 映像をネパールと日本の架け橋に

Dipesh Kharel

東京大学大学院情報学環・学際情報学府の客員研究員

2017年東京大学大学院学際情報学府博士課程卒業

専門分野：映像人類学

出身国・地域：ネパール

映像人類学は民族誌映像や写真などの映像研究手法を用いて人間や社会を研究する学問である。Dipesh Kharel は映像人類学者であり、東京大学大学院情報学環・学際情報学府の客員研究員である。2017年に博士課程を修了、その際、「ネパール人の日本移民に関する研究」で東京大学総長賞を受賞している。社会に対する深い関心と映画制作の情熱で移民の社会的影響を明らかにし、ドキュメンタリーを通じた一般の意識啓蒙をめざしている。

## ネパールの小村から...



Kharel はネパール北東部の山岳地帯に位置する Sunkhani 村の出身である。村の住民は様々なカーストや民族集団で構成されている。村には電気も交通も近代的な設備もない環境で育ち、16才までは私達が毎日当たり前のように使用しているデジタルガジェットを見たことすらなかった。学校、と言ってもちゃんとした校舎はなく、登下校には片道二時間を要した。小さい頃から学業優秀で、夜遅くまで灯油ランプをつけて勉強をしていた。「よくランプを消さずに眠りに落ちてしまい、母が部屋に入って来ては、『消しなさい。』と言われたものでした。」と笑う。人々の生活や文化に対する興味は、人間関係の緊密な村社会で常に人と自然に囲まれて育ったことから生まれたと話す。

その後カトマンズの高校を経て、トリブヴァン大学で環境科学と工学を学ぶ。映画制作の情熱が目覚めたのは大学在学中に手がけた環境に関するドキュメンタリー・プロジェクトに参加した時のことだった。「学位は研究室でのラボワークで取得できるものですが、私はもっと人々と協働作業をし、社会を知りたいと思いました。」Kharel はこのように語る。「新たに見いだした映画制作への情熱とあいまって、自分のライフワークに目覚めました。」該当するコースを幅広く探した結果、ノルウェーの北極圏内に位置する Tromsø 大学に行き当たる。ノルウェー政府国費奨学生に選ばれ2004年にネパールを発ち、映像文化研究で哲学修士(MPhil)の学位を取得した。

2007年にネパールに戻ると、トリブヴァン大学で教職に就き、質的調査・研究手法、定量調査手法を教える傍ら、政府のメディア調査コンサルタントとしてネパールの公衆衛生向上に努める。この時ネパールではトイレの普及率が低く野外での排泄が深刻な問題となっていた。全人口の半数に影響を及ぼし、毎年13,000人もの子供が亡くなっていた。「これが私の最初の実際の社会貢献でした。」

## 東大へ



ネパールでフィルム制作を行う Kharel 2015年5月

(Photo by Asami Saito)

アジア太平洋地区への深い関心から、2009年に立命館アジア太平洋大学（大分県別府）に

日本政府（MEXT）国費奨学生として研究をする機会を得、日本に拠点を移した。ビデオカメラを調査ツールとして使い、対象者の視点から人間や文化を観察する文化人類学研究を深め、ネパール人移民の映像民族誌調査プロジェクトも行い、二つ目の修士号を取得。その後、日本において引き続き移民研究を続けることに決め、2012年東大博士課程へ、東大の旅が始まった。

ネパール人の日本入国者は2005年の5,314人から2018年には80,380人と近年急増している。最も増加しているのはレストラン部門で、ネパール人が経営するカレー料理店は全国で3000軒あり、

東京だけでも500軒に上る。労働者は通例、日本で働く為に大金を払ってやってくる。

Kharelによれば、入国者達は借金の返済が終わると、本国への送金を開始するという。稼いだ金で子供に良い教育を受けさせることができるようになる。多くは最終的には家族を日本へ呼び寄せる。その結果、ネパール人女性と子供の日本への入国も増えている。「このことで、ネパール人社会のジェンダー・ダイナミズムには変化が生じています。日本に来たネパール人女性は、本国の100倍以上の収入を得ることで自信を持ちます。」「この移民の波は、ネパールにも大きな社会経済的影響を及ぼしています。ネパールの農村マルマという村からは人口の40%以上が日本に移民しています。この村で受け取る外国からの送金は日本からの送金が一番多いのです。今日では、村は『リトル・ジャパン』と呼ばれています。」

Kharelが制作したドキュメンタリー映画「Play with Nan」は博士課程で集めた調査データを編集したものであり、人々の日常生活がカメラに収められています。彼の目的は、移民連鎖の両端から包括的な映像を撮り、ネパールと日本両国における現実と社会的影響を探ることであった。8年間にわたり100人以上のネパール移民と緊密に連携し、移民の全プロセスを追った。映像では日本における移民の生活、母国の家族、家族との交流などが描写されている。



インドのカンプル近郊の寺院で宗教儀礼の準備の様子を撮影 Kharel、11月2015。(Photo by Frode Storaas)

「これは民族誌映像（エスノグラフィック映画）であり、人々の日常生活やその文化を音と映像で表現したものなので、テレビのドキュメンタリーとはまったく異なります。」と Kharel はこう語る。テレビのドキュメンタリーの場合、プロデューサーがあるストーリーを思い描き、それを映像で捉えようとすることが多い。研究者としてはまったく反対のことを行います。つまり、コミュニティに行き、ストーリーを探るのです。私の映像には脚色はないかも知れませんが、映し出される生の現実には示唆に富むものだと思います。」

この映画は制作以来 60 箇所以上の国際ドキュメンタリー映画祭や国際映像人類学映画祭および海外、国内の大学で上映されたほか、日本の 50 箇所以上の地域社会でも上映された。2013 年、英国王立人類学協会 (RAI) から Best Ethnographic Research Film Prize、2014 年、アメリカ人類学会 (AAA) から David Plath Media Award をはじめ、複数の賞を受賞している。

彼は情報を伝えることの必要性を強調している。人々のストーリーを共有することは文化の壁や国籍の違いからくるギャップを埋めることに役に立つのではないかというのが彼の信条である。実際、グローバリゼーションと世界的な移民の急増という文脈で考えると、このことはこれまで以上に重要であると思われる。「現在私達はこれまでになく繋がりの強い世界に生きています。私の故郷のような村でさえソーシャル・メディアを通じて世界にアクセスし繋がることができます。だから私は、映像人類学の手法でこういった場所から得たデータを自分の研究を通して今まで以上に世界に伝え繋いでいきたいのです。」

## 総長賞

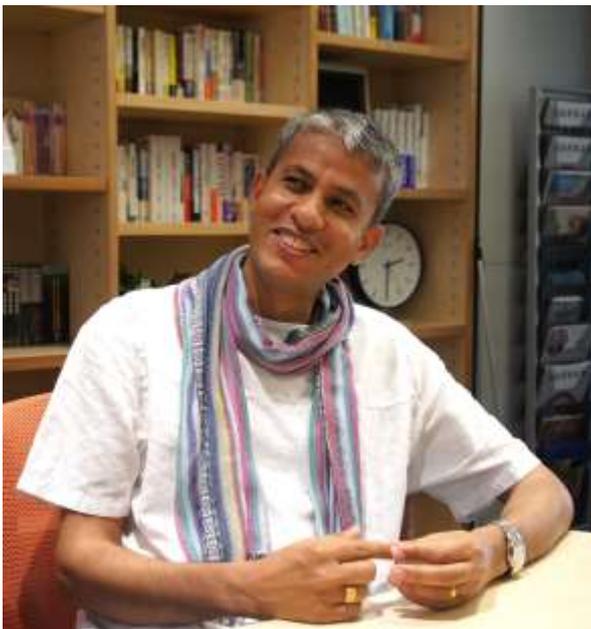


五神総長、Kharel に総長賞を授与

Kharel は、映像人類学の手法を用いて移民研究に新しいアプローチをもたらしたという理由で、2018 年に東京大学総長賞を受賞した。彼は研究を通してネパールと日本の橋渡しをするとともに、世界中の多くの人々にその結果を見せることに成功した。「この受賞はとても嬉しいものでした。」Kharel はこう語る。「私の博士号取得 (Ph. D.) は、決して一人では成し遂げ得なかった。情報学環・学際情報学府の方々、教員、指導教員、妻をはじめとする私の人生で出会ったすべてのの方々から無条件のサポートをいただいた全員の努力の

結晶だと思っています。2015 年の地震の時、私はネパールで撮影していました。私の故郷は完全に破壊され、私も家の下敷きになるころでした。居合わせた場所も悪く、研究データも失い、Ph. D. の学位の取得も諦めかけました。人々の助けがなければ、私は今ごろこうして博士号の学位を取得していなかったかもしれません。」

## 現在の仕事と将来のビジョン



Kharel は東京大学大学院情報学環・学際情報学府の客員研究員として東京大学で研究を続けている。「東大には優れた設備がありますし、素晴らしい学者の方々にもお会いすることができます。教員、研究者および学生は様々なバックグラウンドを持っているため、国際色豊かな環境となっており、知識を分かち合う素晴らしいプラットフォームになっています。日本語はほとんど話せませんが、支障を感じたことはありません。」現在、東京大学大学院情報学環・学際情報学府ではポストドクコースが 6 つあるが、その中の ITASIA プログラムは英語で開講されており、留学生数が増加している。

現在は世界各地の研究者とともに、3 つの共同研究プロジェクトを手がけている。一つ目のプロジェクトはベトナムとネパールから日本への学生の流入を調べるプロジェクトである。ベトナムからの学生は相対的に一番増え続けている。次のプロジェクトは様々な宗教を持つ人々が暮らすインド北部のウタール・プラデシュ州の

カンプール市での調査プロジェクトである。彼はドキュメンタリー映画「A Kali Temple Inside Out」の共同ディレクターを務めたが、これは、カーリー寺院の中、そして寺院の外を軸に様々な宗教を持つ人々がどのように共存しているかを探ろうとするものである。三つ目のプロジェクトは 2015 年の地震がネパールに及ぼした影響に関するプロジェクトである。Kharel は地震で人々がどのような影響を受けたかと彼らの再生への道を描いた国際共同制作ドキュメンタリー映画「希望の種」のディレクターを務めた。

Kharel は先頃、上智大学で日本学術振興会（JSPS）の外国人特別研究員に選ばれた。彼は日本において移民研究を継続し、変化するエスノスケープ（民族の地景）の理解を深めるとともに日本への移民の将来の動向を把握し、政策策定に貢献したいという思いもある。「マルクス主義、従属理論は移民の負の影響に焦点を当てたものである。負の影響というものも確かにあるのですが、この理論では様々な他の側面を説明することができません。私は、移民は社会経済の発展にとってプラスの力になりうると考えております。それは多様性を尊重し個々の生活が今よりもっと良くなることことです。」彼は自分の研究が平和的な移民政策策定、ひいては平和的な世界を作り出す一助となってくれるよう願っている。

そして、言うまでも無く、映像作家と教育者としての仕事は、引き続き行って行きたいと思っている。Kharel は言う「研究者や映像作家は、得た情報を提供し、人々の無関心から関心への意識をを広める責務を担っていると思います。映画は一般の人々が理解しやすいという意味からも素晴らしい手段だと思います。」  
「現代は誰もが携帯電話やカメラを持っている恵まれた時代に生きています。あらゆるものを記録し、資料を収集することができます。このため、映像調査の手法はどのような研究分野にも応用できます。それは、私達が利用できるデジタルメディアリソースやテクノロジーをどのように利用するかということに尽きます。」彼はこの調査手法のアカデミアな利用を推進し、映像人類学をという学問が世界中に広まることを期待している。

## 成功の勲章



「これが総長賞の銀杏の葉です。銀杏の葉は東大の象徴です。今でも入学した日のことを覚えています。私の目の前には銀杏の葉のカーペットが広がっていました。総長賞をいただいたこと自体がこれまでの人生の中で最高だと記憶しています。総長とお話しさせていただき、素晴らしい研究者ともお会いし、自分の研究や経験をシェアさせていただくことができました。自分のアカデミック・キャリアでこれほどのところまで来られるとは夢にも思っていませんでした。ネパールの山深い村出身の私にとって、東大は遠くの夢のように思われていました。この賞を見るたび、私がここまで来るのをサポートして下さった方々全ての方たちの顔が浮かびます。この賞を私が東大で学び始めてほんの数ヶ月後に他界した母に、是非とも見せてあげたかったです。母は幼い頃から私の教育を後押ししてくれていました。母がいなかったら、現在の私はなく、このような受賞はなかったでしょう。」

（映像をネパールと日本の架け橋に | Discover Our People」 November 25, 2018 [https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/en/features/z1304\\_00048.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/en/features/z1304_00048.html) の日本語訳です。）